旧台湾警察諸警友会の回顧（六訂稿）

―日本統治下台湾警察史の一齣―

（令和 4（2022）年 7 月 31 日（日）現在）

（補正経緯）

（HP 初載）：初　稿: 平成 20（2008）年 1 月 1 日作成
改訂稿: 平成 20（2008）年 3 月 15 日作成
再訂稿: 平成 21（2009）年 1 月 13 日作成
三訂稿: 平成 21（2009）年 5 月 15 日作成
（「4（3）霧社会」を特に補正した。）
四訂稿: 平成 21（2009）年 12 月 30 日作成
（小橋従道氏の御訃報、一部補正）
五訂稿: 平成 25（2013）年 10 月 29 日（火）作成
（鷲巣敦哉案件のため一部補正、追加）
六訂稿: 令和 4（2022）年 7 月 31 日（日）作成
（レイアウト全面変更、一部補正、追加）

〔目　　次〕

1 はじめに ……2
2 諸警友会の概要 ……2
3 諸警友会の内容 ……3
（1）台北警友会 ……3
（2）台中警友会 ……3
（3）新竹警友会 ……4
（4）台南警友会 ……4
（5）高雄警友会 ……4
（6）八甲会（宮城八甲会） ……5
（7）台湾警友連合 ……5
（8）台湾警友の会 ……6
4 その他諸会等 ……6
（1）台日商事株式会社 ……6
（2）台湾警友連合会及び台湾友好親善協会 ……6
（3）霧社会 ……6
（4）台湾台日警友親善協会（在台湾） ……8

1 はじめに

従来からもそうであったが、近年の『台湾協会報』等日本統治下台湾関係者関連紙誌を見ていると、会員の方々の高齢化、逝去に伴い、旧台湾所在各校同窓会、関係同窓団体等の解散を報ずる記事が眼につく。大変残念なことであるが、時の流れに伴うもので致し方なきことである。日本統治下台湾警察に奉職していた方々も、戦後それぞれその同窓団体である警友会を組織し大いに活動していたが、当時の諸氏による警友会自体は現在では既に完全に消え去っている。このため、現時点でこれら諸警友会の過去の活動を僅かでも記録に留めておくことは、日本統治下台湾警察史、ひいては当該時期台湾史を考える上でいささか意味ありかとも思われるので、以下その一端を振り返っておくこととする[1]。なお、各警友会の刊行していた各警友会報、名簿類は、当時の台湾警察のことを知り得る貴重な資料であり、その収集、保存が切に望まれるところである[2]。ただ率直にいうならば、警友会検討はもっと早くになされるべきであったことが悔まれるところである。

2 諸警友会の概要

旧台湾警察関係の警友会としては、管見の限りでは、昭和 27（1952）年設立の宮城八甲会[3]（平成 6（1994）年 4 月に「八甲会」と改称。）を別にすると、昭和 40 年代後半から設立され始め、各州関係では、① 台北警友会、② 台中警友会、③ 新竹警友会、④ 台南警友会及び⑤ 高雄警友会の五つが存在し、また、州を越えてのものとしては、例えば上記宮城八甲会（平成 6 年 4 月より「八甲会」と改称。）が代表的であって、特に昭和 50、60 年代にはそれぞれ活発に活動していた。しかるに、その後、会員の高齢化に伴う構成員数の減少により、各会単独での大きな活動が難しくなったことにより、こうした活動を維持するために、平成 5（1993）年 2 月 12 日に、台北警友会、台中警友会、台南警友会及び八甲会を存続させながら、その上部統合組織として台湾警友連合なるものが設立された。同連合は、機関紙として『台湾警友連合会報』を刊行したが、平成 12（2000）年 1 月に解散した。爾後は、台北、台中、台南及び八甲の四警友会が、それぞれに見合った活動を

---

[1] 本稿は、かつて『台湾協会報』に寄稿した「旧台湾警察諸警友会の回顧①―旧各州警友会・八甲会の変遷を中心に―」第 642 号（平成 20 年 3 月 15 日刊）、「同②・完」第 643 号（平成 20 年 4 月 15 日刊）を、その後の推移等を踏まえ補訂しつつあるものである。

[2] 編者も一時期収集に努めた時期があった。当時の各警友会幹部の方々の御配慮を得て、『新竹警友会会報』、『台中警友会会報』、『台湾警友連合会報』及び『台北・台中・台南警友連合会報』についてはほぼ全号に当たることができたが、その他については、開始時期が遅すぎて、僅かにその一部を調べ得たにとどまる。これら会報は、発行対象、部数も限定されたものであり、早急に然るべき措置を講じないと、永遠に見られなくなる可能性があることを危惧する。なお、『新竹警友会会報』の一部は国立国会図書館に収蔵されている。一般財団法人台湾協会においてもこうした資料全般につき近年然るべき措置を取られつつあるやに聞く。

[3] 「八甲」は、台湾総督府警察官及司獄官練習所（以下「練習所」という。）所在地の町名であった台北市八甲町（現在の台北市広州街）に由来する。

独自に展開するとともに、その連合機関紙（八甲会を除く台北、台中、台南の三警友会で構成）として『台北・台中・台南警友連合会報』が刊行されたが、これも、平成 18（2006）年 11 月 1 日に解消した。現在では、新たに台中警友会の二世会員の方々を中心とした親睦団体「台湾警友の会」が発足し、『台湾警友の会会報ばんざくろ』を創刊の上活動しているのみである（その後のことは不詳（令和 4（2022）年 7 月 31 日追記）。）。なお、新竹警友会は何故か早くより独自の歩みをみせ、高雄警友会はあまり活動がなかったようである。この他、督府警務局関係の会や練習所乙科同期会等もあったと聞くが、詳しいことは不明である。また、台湾現地には当時の台湾人警察官による台湾台日警友親善協会があったが、これも、2007（平成 19）年初め頃解散したと聞く。

3 諸警友会の内容

上記各警友会の設立、解散及び会報等の状況を、次に紹介しておく。

（1）台北警友会

昭和 51（1976）年 10 月 22 日に設立され、当初は「台北州警友会」といった。平成 18（2006）年 5 月 1 日解散。会報として『台北警友会報』（刊行期間不詳）を刊行、平成 6（1994）年頃終刊。その後『台湾警友連合会報』（台北警友会分）に移行。同紙は第 1 号（平成 6 年 4 月 1 日刊）～第 17 号（平成 11 年 12 月 1 日刊）を刊行。次いで、『台北・台中・台南警友連合会報』（台北警友会分）に移行。台北警友会分は第 2 号（平成 12 年 9 月 1 日刊）～第 18 号（平成 18 年 8 月 1 日刊）に掲載。ただし第 2 号は事情あって平成 12 年 9 月 1 日刊と平成 13 年 1 月 1 日刊の 2 回あり[4]。同紙第 18 号（平成 18 年 8 月 1 日刊）に、「台北警友会解散の御挨拶」、「台北警友会の歩み」を収載している。

（2）台中警友会

昭和 46（1971）年 5 月 8 日設立。平成 18（2006）年 11 月 1 日解散。新たに同会二世会員を中心に親睦団体「台湾警友の会」（下記「3（8）台湾警友の会」参照。）が発足した。会報として『台中警友会報』第 1 号（昭和 56 年 11 月刊）～第 43 号（平成 6 年 2 月刊、終刊）を刊行。その後『台湾警友連合会報』（台中警友会分）に移行。第 1 号（平成 6 年 4 月 1 日刊）～第 17 号（平成 11 年 12 月 1 日刊）を刊行。更に『台北・台中・台南警友連合会報』（台中警友会分）に移行。台中警友会分は、第 1 号（平成 12 年 4 月 1 日刊）～第 18 号（平成 18 年 8 月 1 日刊）刊行。ただし、第 2 号は事情あって平成 12 年 9

[4] 詳しいことは不明であるが、創刊時にあるいは台北警友会の対応が間に合わなかったためか、第 1 号は『台中・台南警友連合会報』として刊行され、本来の『台北・台中・台南警友連合会報』は第 2 号からであるので、この第 2 号を二回出すことで、『台北・台中・台南警友連合会報』としての号数調整を改めてしたものかとも思われる。

月 1 日刊と平成 13 年 1 月 1 日刊の 2 回あり。新たな親睦団体「台湾警友の会」の会報として、『台湾警友の会会報ばんざくろ』を創刊（「ばんざくろ」は当時の「パーラ、蕃柘榴」に由来するとの由）。同紙創刊号（平成 19 年 1 月 1 日刊）には「新年のご挨拶」、「平成 18 年度台中警友会総会」記事等を掲載。現在第 12 号（平成 25 年 4 月 15 日刊）まで刊行（その後のことは不詳（令和 4（2022）年 7 月 31 日追記）。）。

（3）新竹警友会

昭和 50（1975）年 3 月 10 日設立、平成 13 年（2001）5 月解散。新竹警友会は、他の警友会とは別個に、独自の活動を長く活発に続けていた。会報として『新竹警友会報』あり。第 1 号（昭和 50 年 7 月）～第 219 号（平成 13 年 8 月）で終刊。同会報は号数、内容とも見事なものである。最後あたりは小橋従道氏（1917～2009）が編輯を担当していた。平成 18（2006）年 11 月 17 日に元同会会長大貫敏之氏（1907～2006）、平成 20（2008）年 10 月に元会員松井森彦氏（1914～2008）が長逝された。両氏はかつて『新竹警友会報』に健筆を振るい、多くの貴重な回想録を残している。うち松井氏は会報の保存にも配意され、同会会報のかなりの部分が後世に残されることとなった（註 2 参照。）。

その後、平成 21（2009）年 9 月 21 日に元同会副会長小橋従道氏が逝去された。同氏は一時期中断の後復活した再生『新竹警友会報』の編輯を一人で担当するとともに、自身も多数の回想を物した。この結果、同紙は寔に立派なものが残ることと相成った。個人的には、日本統治下台湾警察の実務に関する多くの疑問に同氏よりその都度書翰でもって御懇篤な御示教をいただけたことは、忘れ得ないことである。同氏の長逝により、日本統治下台湾警察史について実体験でもって詳細に語ることができる方はおられなくなったと思われ、当該時期警察史研究も、いよいよ新たな段階に入ったといわなければならない。

（4）台南警友会

昭和 63（1988）年 10 月 25 日設立、平成 14（2002）年 1 月解散。会報として、『台南警友会報』あり。平成元（1989）年 2 月創刊、第 13 号（平成 5 年 10 月刊）で終刊。『台湾警友連合会報』（台南警友会分）に移行する。第 1 号（平成 6 年 4 月 1 日刊）～第 17 号（平成 11 年 12 月 1 日刊）を刊行。その後『台北・台中・台南警友連合会報』（台南警友会分）に移行。台南警友会分は第 1 号（平成 12 年 4 月 1 日刊）～第 5 号（平成 14 年 1 月 1 日刊）に掲載。ただし、第 2 号は事情あって平成 12 年 9 月 1 日刊と平成 13 年 1 月 1 日刊の 2 回あり。

（5）高雄警友会

昭和 50（1975）年頃設立、その後のことは不詳。会報として『高雄警友会報』があったと聞くが詳細不明。

（6）八甲会（宮城八甲会）

昭和 27（1952）年 4 月 10 日に宮城八甲会設立。平成 11（1999）年 12 月で会報活動は一旦中断するも、活動そのものは、その後もしばらく続いたようである。会員の対象は、宮城県出身の元全島警察官で、「八甲」は、上記（註 3）のように、練習所所在地の町名であった台北市八甲町（戦後台北市広州街）に由来する。宮城八甲会は、平成 6（1994）年 4 月より八甲会と改称された。なお、宮城県は領台当初は台湾警察官数が日本一で、昭和期でも本州では最も多かったとの由である[5]。会報として『宮城八甲会報』あり。第 1 号（昭和 53 年? 月刊）～第 44 号（平成 6 年 1 月刊）で終刊。その後『台湾警友連合会報』（八甲会分）に移行する。同紙八甲会分は第 1 号（平成 6 年 4 月 1 日刊）～第 17 号（平成 11 年 12 月 1 日刊、終刊）を刊行。

別に、同会の単行会誌として、昭和 52（1977）年に創立 25 周年記念誌『八甲会誌』（120 頁）、昭和 62（1987）年 6 月 15 日に創立 35 周年記念誌『八甲会誌』（220 頁）を各刊行。更に、平成 15（2003）年 3 月に創立 50 周年記念誌『八甲会誌』（59 頁）刊行。これら三誌は、他の警友会にはないもので、寔に貴重なものである。

宮城八甲会、八甲会の発展に尽瘁された佐藤直次氏（1910～2003）は平成 15（2003）年 2 月 25 日に長逝された。同氏は往時の台中州警察幹部で、戦後は仙台で活躍した。後任会長は小泉三郎氏（1916～2007）であった。同氏は往時の台北州警察幹部で、戦後宮城県警察の要職を歴任した。

（7）台湾警友連合

下記「4（2）台湾警友連合会」とは別個のものである。各警友会会員減少によりまとまった活動をするための上部統合組織たることを目指して、平成 5（1993）年 2 月 12 日に設立。台北、台中、台南各警友会及び八甲会で結成。新竹、高雄両警友会は加入せず。同連合委員長は当時の八甲会会長佐藤直次氏。平成 12（2000）年 1 月解散。会報として『台湾警友連合会報』（各警友会分）あり。第 1 号（平成 6 年 4 月刊）～第 17 号（平成 12 年 1 月刊）で一応終刊。ただし、会報のみは更に新規発行の形（『台北・台中・台南警友連合会報』）にして第 1 号（平成 12 年 4 月 1 日刊）～第 18 号（平成 18 年 8 月 1 日刊）を継続刊行[6]。同紙第 18 号に、「台湾警友連合の歩み」を掲載。

『台北・台中・台南警友連合会報』の表題表示は、やや複雑である（註 19 参照。）。最初は「台中及び台南各警友会」分（第 1 号）、次いで「台北、台中及び台南各警友会」分（両第 2 号以下）で始まるも、途中平成 14（2002）年 1 月刊の第 5 号を最後に「台南

---

[5] 佐藤直次氏『台中警友会報』第 19 号（昭和 61 年 9 月刊）参照。

[6] 上述（註 4）のように、詳しいことは不明であるが創刊時にあるいは台北警友会の対応が間に合わなかったためか、第 1 号は『台中・台南警友連合会報』として刊行され、『台北・台中・台南警友連合会報』は第 2 号からであるので、第 2 号を二回出すことで『台北・台中・台南警友連合会報』としての号数調整を改めてしたものかとも思われ、号数としては全部で 19 号出ている。

警友会」分がなくなり、その後は「台北、台中警友会」分のみで存続する。その後平成 18（2006）年 5 月に台北警友会が解散し、「台中警友会」分のみが残存するも、台中警友会も平成 18（2006）年 11 月 1 日に解散したことによりついに終刊。これらの御編集はすべて台中警友会の山口玲子氏（1933～）が担当していた。同氏には、その台湾回顧録をも収録された『季節のない島』（自己出版、平成 14 年 2 月 20 日刊）をはじめ、台湾関係の貴重な御著作が多い。

（8）台湾警友の会

上記「3（2）台中警友会」の後身の会。平成 19（2007）年 1 月 1 日設立。往時の台湾人警察官等との交流活動にも努めている。会報として『台湾警友の会会報ばんざくろ』（上述のように、「ばんざくろ」は当時の「パーラ、蕃柘榴」に由来するとの由。）がある。同紙創刊号は平成 19 年 1 月 1 日刊、現在第 12 号（平成 25 年 4 月 15 日刊）まで出ている。これらの編輯も山口玲子氏が引き続いて所掌している。（その後のことは不詳（令和 4（2022）年 7 月 31 日追記）。）

4 その他諸会等

上記本来の警友会の他に、次のものがあった。この他にも旧台湾警察関係の会は多々あったと思うが不詳。

（1）台日商事株式会社

昭和 62（1987）年 2 月 14 日、当時の各警友会の経済的基盤確立のためとして、小松延秀氏（1910～1991、元台北州高等警察課長、当時台北警友会会長）が中心になって設立されたもので、下記「4（2）台湾警友連合会」と一体のものであったのかと思われる。その後解散せしか? なお、小松氏には、『義愛公と私台湾で神様になった男の物語』（台湾友好親善協会、平成元年 5 月 30 日刊）がある。

（2）台湾警友連合会及び台湾友好親善協会

上記「3（7）台湾警友連合」とは別個のものである。上記「4（1）台日商事株式会社」と一体のもので、昭和 62（1987）年 12 月 15 日に小松延秀氏が中心になって結成されるも、一部に異論があって解消したと聞く。その後台湾友好親善協会（警友諸団体の活動助成を目的にする。昭和 63 年 4 月 1 日発足。）に移行するが、これも平成 3（1991）年の小松氏の逝去で解散せしか? このあたり詳しいことは不明である。

（3）霧社会

霧社会については、初稿（平成 20〈2008）年 1 月 1 日作成）時点の記載[7]が資料として極めて不十分であったので、その後平成 21（2009）年 5 月に霧社研究の権威である島崎義行氏（1918～2014）に特にお願いし、以下の如き御懇篤な御示教を賜った。厚く御礼申し上げるものである。

同会は、日台の霧社関係者で組織されたものであるが、その後日台の中心人物が皆逝去され、自然消滅との由。霧社会大会は、第 1 回霧社会（横浜市、昭和 51（1976）年 10 月 26 日）～第 21 回霧社会（広島大会、平成 8（1996）年 10 月 29 日）で休止になる。なお、第 3 回霧社会は鹿兒島（昭和 53（1978）年 10 月 27～28 日）と台湾（昭和 54（1979）年 3 月 24～28 日霧社廬山温泉）で、第 6 回霧社会は京都（昭和 56（1981）年 11 月 7～8 日）と東京（昭和 56（1981）年 12 月 23 日）で、各 2 回ずつ開催されているので、霧社会大会としては都合 23 回開催されたこととなる。

第 4 回霧社会（昭和 54（1979）年 10 月 28 日、東京九段会館）では、「霧社事件 50 年慰霊祭」（霧社事件: 昭和 5（1930）年 10 月 27 日発生）とも関連があったようであり、第 6 回霧社会（東京分、昭和 56（1981）年 12 月 23 日、東京九段会館）では、「下山一氏表彰祝賀会」があったとのことである。また、第 8 回霧社会（昭和 58（1983）年 7 月 27 日～8 月 1 日霧社桜ホテル）時の参加者は、日本側 45 人、台湾側 50 人、第 10 回霧社会（昭和 60（1985）年 8 月 1 日佐賀ホテル竜登園）時の参加者は、日本側 107 人、台湾側 30 人であり、この頃が、霧社会として最も盛会であった模様である。なお、台湾で開催されたものは、① 第 3 回霧社会（昭和 54（1979）年 3 月 24～28 日霧社廬山温泉）、② 第 8 回霧社会（昭和 58（1983）年 7 月 27 日～8 月 1 日霧社桜ホテル）、③ 第 11 回霧社会（昭和 61（1986）年 8 月 2～7 日霧社碧華荘）、④ 第 15 回霧社会（平成 2（1990）年 8 月 20 日～8 月 25 日埔里円環飯店）、⑤ 第 18 回霧社会（平成 5（1993）年 8 月 14 日～8 月 19 日霧社碧華荘）の五回である。

霧社会については、四倉富重夫氏（? ～2004）『霧社会の歩み』（昭和 60 年 8 月 1 日刊）あり。また、島崎氏「さらば霧社会①～③（完）」（①: 『台湾協会報』第 617 号（平成 18 年 2 月 15 日刊）、②: 同第 618 号（平成 18 年 3 月 15 日刊）、③（完）: 同第 619 号（平成 18 年 4 月 15 日刊））に詳しい。その後、同氏は「引揚げて湾生は頑張った」『台湾協会報』第 656 号（平成 21 年 5 月 15 日刊）、「回想の霧社（1）」『台湾協会報』第 663 号（平成 21 年 12 月 15 日刊）、「回想の霧社（完）」『台湾協会報』第 664 号（平

---

[7] 初稿（平成 20〈2008〉年 1 月 1 日作成）時点の記載: 「日台の霧社関係者で組織されたもの。第 1 回霧社会（横浜市、昭和 51 年 10 月 26 日）～第 21 回霧社会（広島大会、開催年月不詳。ただし、第 19 回霧社会は平成 6 年 10 月 15 日開催とのこと。）で、休止のようである。現在では、中心メンバーは御逝去との由。同会については、四倉富重夫氏（? ～2004）『霧社会の歩み』（昭和 60 年 8 月 1 日刊）あり。また、島崎義行氏（1918～2014）「さらば霧社会①～③（完）」（①: 『台湾協会報』第 617 号（平成 18 年 2 月月 15 日刊）、③（完）: 同第 619 号（平成 18 年 4 月 15 日刊））に詳しい。なお、島崎氏は、先般、「引揚げて湾生は頑張った」を『台湾協会報』第 656 号（平成 21 年 5 月 15 日刊）に寄稿されておられる。同氏の一連の台湾、霧社関係御論稿の集成が望まれるところである。」⇒（令和 4（2022）年 7 月 31 日追記 ⇒註 9 参照）

成 22 年 1 月 15 日刊）等を寄稿している。なお、島崎氏は 2008（平成 20）年 8 月台湾公開の有名な映画『海角七号』（日本公開時題名『海角七号 君想う、国境の南』）[8]との関係も深いと聞く。同氏の一連の台湾、霧社関係論稿の集成が望まれるところである[9]。

（4）台湾台日警友親善協会（在台湾）

台湾側のもので、往時の台湾人警察官の団体である。1995（平成 7）年 8 月 21 日設立、発足時の名称は「中華民国台日警友警務人員及眷属親善協会」、1999（平成 11）年 4 月 16 日「台湾台日警友親善協会」に名称変更。同会設立以前にいくつかの警友会ありしとの由。同会は 2007（平成 19）年初め頃解散せしか[10]。なお、その後は、例えば上記「3（8）台湾警友の会」等との個人的な「友誼交流」が続いているようである。会報として『台日警友通信』を発行していた（2003 年 4 月時点で第 27 号を刊行）。同会については当時同会秘書長であった陳宗氏（? ～2004、昭和 15 年時点で 20 歳、後に同会副理事長）の「吾が会の歩み」（『台日警友通信』第 27 号、2003 年 4 月 1 日）に詳しい。（その後のことは不詳（令和 4（2022）年 7 月 31 日追記）。）

（了）

---

[8] 映画『海角七号』〈http://www.kaikaku7.jp/〉〈http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%B7%E8%A7%92%E4%B8%83%E5%8F%B7_%E5%90%9B%E6%83%B3%E3%81%86%E3%80%81%E5%9B%BD%E5%A2%83%E3%81%AE%E5%8D%97〉（平成 25 年 10 月 29 日追加）

[9] 島崎義行氏は平成 26（2014）年 5 月に逝去された。同氏については、下記「台湾～我が故郷　喜早天海（きそう たかひろ氏、日本と台湾の懸け橋になる会世話人）愛知李登輝友の会　公開日: 2014 年 11 月 23 日　カテゴリー: 日台共栄」参照。（令和 4（2022）年 7 月 31 日追加）〈https://ritouki-aichi.com/kyoei/%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E3%80%9C%E6%88%91%E3%81%8C%E6%95%85%E9%83%B7%E3%80%80-%E5%96%9C%E6%97%A9-%E5%A4%A9%E6%B5%B7%EF%BC%88%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%A8%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E3%81%AE%E6%87%B8/20141123〉

[10] 『台湾警友の会会報ばんざくろ』第 2 号（平成 19 年 7 月 1 日刊）第 3 面の葉新有氏「台湾だより」参照。